

教王護国寺旧境内（東寺旧境内）

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

教王護国寺旧境内（東寺旧境内）

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、建物建替えに伴う教王護国寺旧境内（東寺旧境内）の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

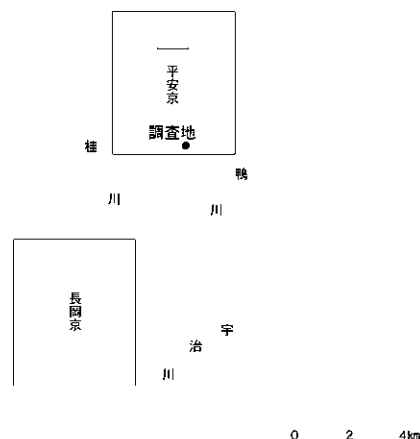
平成 21 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 教王護国寺旧境内（東寺旧境内）
- 2 調査所在地 京都市南区大宮通八条下る九条町 399 番 35
- 3 委 託 者 社会福祉法人 東寺学園 理事長 森 泰長
- 4 調査期間 2009 年 5 月 25 日～ 2009 年 7 月 1 日
- 5 調査面積 約 330 m²
- 6 調査担当者 加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 遺物番号 土器類・瓦類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 加納敬二
- 14 備 考 上記以外に調査・整理並びに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層位	4
(2) 遺構の概要	5
(3) 平安時代の遺構	5
(4) 室町時代の遺構	8
(5) 江戸時代の遺構	11
4. 遺 物	12
(1) 土器類	12
(2) 瓦類	14
(3) 自然遺物	17
5. ま と め	19

図 版 目 次

図版 1	遺構	平安時代中期から室町時代（第 2 面）遺構実測図（1：150）
図版 2	遺構	江戸時代後期から幕末期（第 1 面）遺構実測図（1：150）
図版 3	遺構	1 平安時代中期から室町時代（第 2 面）全景（西から） 2 江戸時代後期から幕末期（第 1 面）全景（西から）
図版 4	遺構	1 井戸 186（北から） 2 井戸 197（北から） 3 井戸 172（南から） 4 堀状遺構 77（北から）
図版 5	遺物	土坑 171・土坑 169・堀状遺構 77 出土土器
図版 6	遺物	堀状遺構 77・溝 184・土坑 298・井戸 172・布掘柱列 5 出土土器
図版 7	遺物	軒丸瓦・横棧瓦
図版 8	遺物	軒平瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景	2
図3	調査風景	2
図4	調査区配置図（1：300）	2
図5	東寺諸院推定復元図	3
図6	基本層位図（1：20）	4
図7	建物3実測図（1：50）	6
図8	建物4・柵6実測図（1：50）	7
図9	井戸186実測図（1：40）	8
図10	堀状遺構77断面図（1：50）	8
図11	井戸197・172実測図（1：40）	9
図12	建物1実測図（1：100）	10
図13	布掘柱列5実測図（1：100）	10
図14	建物2実測図（1：100）	11
図15	出土土器実測図（1：4）	13
図16	出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	15
図17	溶着した瓦	16
図18	塼	16
図19	堀状遺構77・流路189出土自然遺物	18
図20	時期別遺構概略図および推定復元図・指図・絵図	20
図21	教王護国寺文書 絵図九「八条與針小路間櫛笥東類指図」	22
図22	「東寺子院古図」	22

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	12
表3	堀状遺構77・流路189出土自然遺物一覧表	17

教王護国寺旧境内（東寺旧境内）

1. 調査経過

調査地は、京都市南区大宮通八条下る九条町 399 番 35 に所在し、東寺保育園の園舎と園庭があった。当保育園の園舎の老朽化に伴い、ここに建て替えが計画がされた。当地は教王護国寺旧境内（東寺旧境内）の一画にあたることから、新園舎の建設に先立ち、埋蔵文化財調査が必要となった。

まず、遺構の残存状況を把握するため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）により試掘調査が実施された。調査は 2008 年 8 月 25 日と 2009 年 5 月 14 日の 2 回行われた。その結果、平安時代から江戸時代の遺物包含層が良好に残存していることが確認され、発掘調査の指導が行われ、調査を実施することとなった。

発掘調査は、2009 年 5 月 25 日から重機掘削を開始した。調査区は、新園舎の対象地に L 字状に設定した。調査面積は約 330 m²である。調査では中世から近世の東寺子院の状況を確認し、さらに東寺伽藍北側での平安時代の実態を明らかにすることを目的に実施した。調査期間中においては文化財保護課から 5 月 29 日、6 月 4 日、6 月 10 日、6 月 18 日、6 月 23 日の 5 回、現場

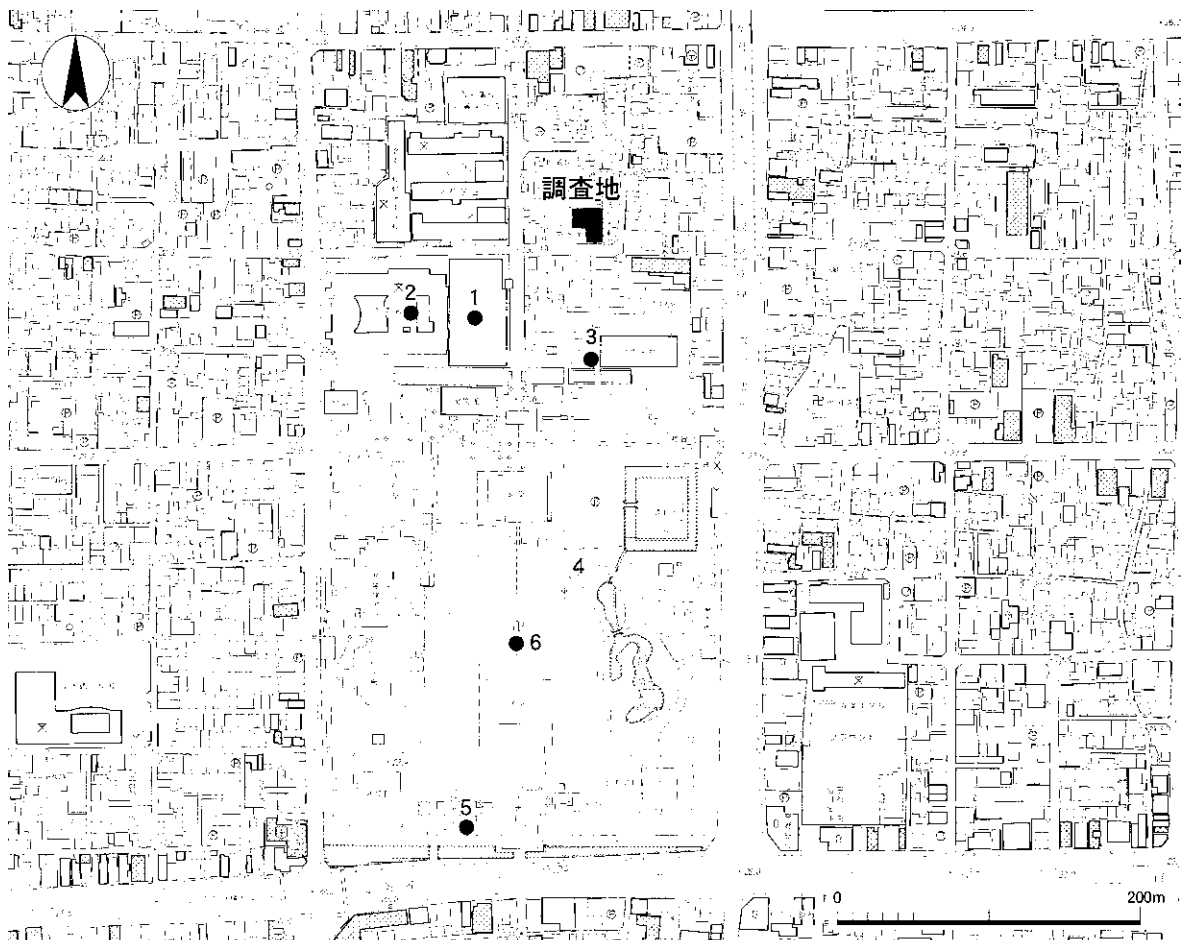


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景



図3 調査風景

指導を受けた。検出した遺構には平安時代から江戸時代のものがある。遺構は建物、土坑、井戸、区画溝、堀状遺構などで、これらを2回（2面）に分け調査・記録した。検出した遺構・遺物から、不明な点が多かった伽藍北側の平安時代における遺構の実態や、中世から近世の東寺子院の変遷の一端を提示し、また緑釉瓦（軒瓦・丸瓦・熨斗瓦）などの東寺造営にかかわる遺物も出土した。以上の成果を挙げ、調査は2009年7月1日に終了した。

なお、調査期間中の6月16日には京都市考古資料館主催の中学生を対象にした体験学習で、京都市立下京中学校の生徒4名を受け入れ、また6月27日には現地公開（参加者約450名）を行い、調査成果の公表、資料の活用に努めた。

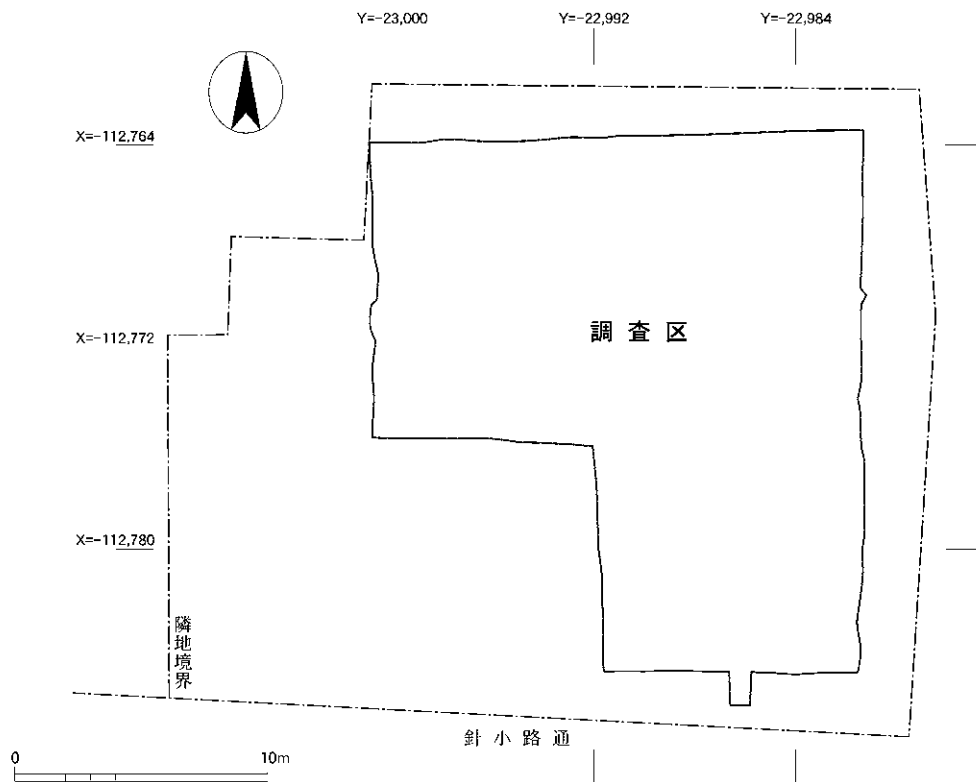


図4 調査区配置図（1：300）

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

調査地は鴨川扇状地の南東にあたり、礫質砂土に形成された地域である。平安京造営以前は礫質砂層の堆積状況から旧河道の存在とその流路が推定される。後述する周辺での既往の調査においても、現地表下 2.0 m で北東から南西方向の自然流路や後背湿地が確認されており、当地域の地形形成過程が明らかにされている。平安京造営以降は条坊が施行され、調査地は平安京左京九条一坊十六町の南西部に該当し、西は櫛笥小路、南は針小路に面し、延暦十五年（796）に創立の東寺境内の北東に位置する。この十六町には、政所院や賤院という、東寺の事務管理を行う施設があったと考えられている¹⁾。調査地の北東には、現在も政所東寺執行家跡として小祠が残されており、政所司を代々世襲してきた空海の母方の祖・阿刀家が管理している。鎌倉時代末期になると、東寺北側には大小多くの子院が建てられはじめる。十六町については室町時代後期の「八条與針小路間櫛笥東頼指図」（『教王護国寺文書』）に、子院や領地の地割りが描かれており、調査地は覚王院と示されている²⁾。江戸時代に作成された絵図面には各子院の名称、地割り、建物配置など詳細に記載されており、調査地は金剛珠院という名称の子院が図示されている³⁾。このように指図や絵図で、中世から江戸時代までの子院の興廃や移動があったことがわかる。現在も東寺北大門から八条通の北総門に至る櫛笥小路に面して観智院、宝菩提院などの子院が建ち並び、当時の様相を今に伝えている。明治時代には調査地の西側にあたる櫛笥小路の西面に東寺中学が創設され、1962年には洛南高等学校として、また、大正四年（1915）には調査地に東寺保育園の園舎が建てられ、現在に至っている。

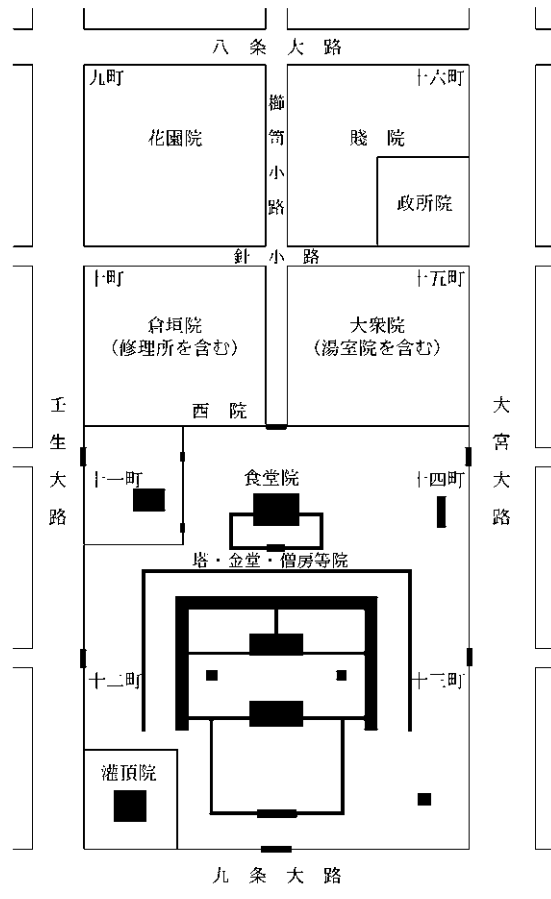


図5 東寺諸院推定復元図

(2) 周辺の調査 (図1)

調査地の周辺では、これまでに1979年の洛南高校校舎新築工事に伴う調査⁴⁾ (図1-1) や、2002年の洛南高校の校舎建て替えに伴う調査⁵⁾ (2) が行われ、室町時代から江戸時代の子院の変遷や区画が明らかにされている。また、両調査では平安時代の焼土や焼けひずんだ瓦を含む遺構が検出され、東寺にかかわる瓦窯が存在していたことを示唆している。その他、1993年には左京

ら後期と鎌倉時代から室町時代に分かれる。平安時代後期と室町時代の遺構が多数を占める。検出した遺構総数は259基である。遺構には柱穴、土坑、溝、堀状遺構、井戸などがある。調査区東端では室町時代の南北方向の堀状遺構を検出した。堀状遺構の西側では、平安時代後期から室町時代の溝や柱穴、土坑を数多く検出した。溝には平安時代後期のものと室町時代のものがある。柱穴は多数検出しているが、建物としてまとめたのは平安時代後期の建物2棟で、他に柵がある。また、堀状遺構内の底面で、平安時代の方形木柵井戸を検出した。

第1面は江戸時代後期である。検出した遺構総数は61基である。遺構には建物、布掘柱列、土坑がある。調査区北側で礎石据付穴群を検出し、柱並びや形状から東西方向の建物2棟を推定した。いずれも江戸時代後期から幕末期の東西棟の建物で、調査区外の北と東に延びるため、全体規模は不明である。また、建物に南接して、東西方向の布掘状の塀か柵の遺構を検出した。

以下に第1面から第2面で検出した主要な遺構について、時期別に概述する。なお、遺構および遺物の時期は平安京・京都I期～期編年案に準拠する¹⁰⁾。

(3) 平安時代の遺構 (図版1・3-1)

流路189 調査区の北東から南西にかけて流れる旧流路である。北肩部は溝148の下面で、南肩部は堀状遺構77の下面で確認した。規模は幅約15m、深さ0.5m以上である。上層の堆積土は南半が褐色粗砂層、北半は黒褐色泥土が主体である。出土遺物がないため、時期は不明である。

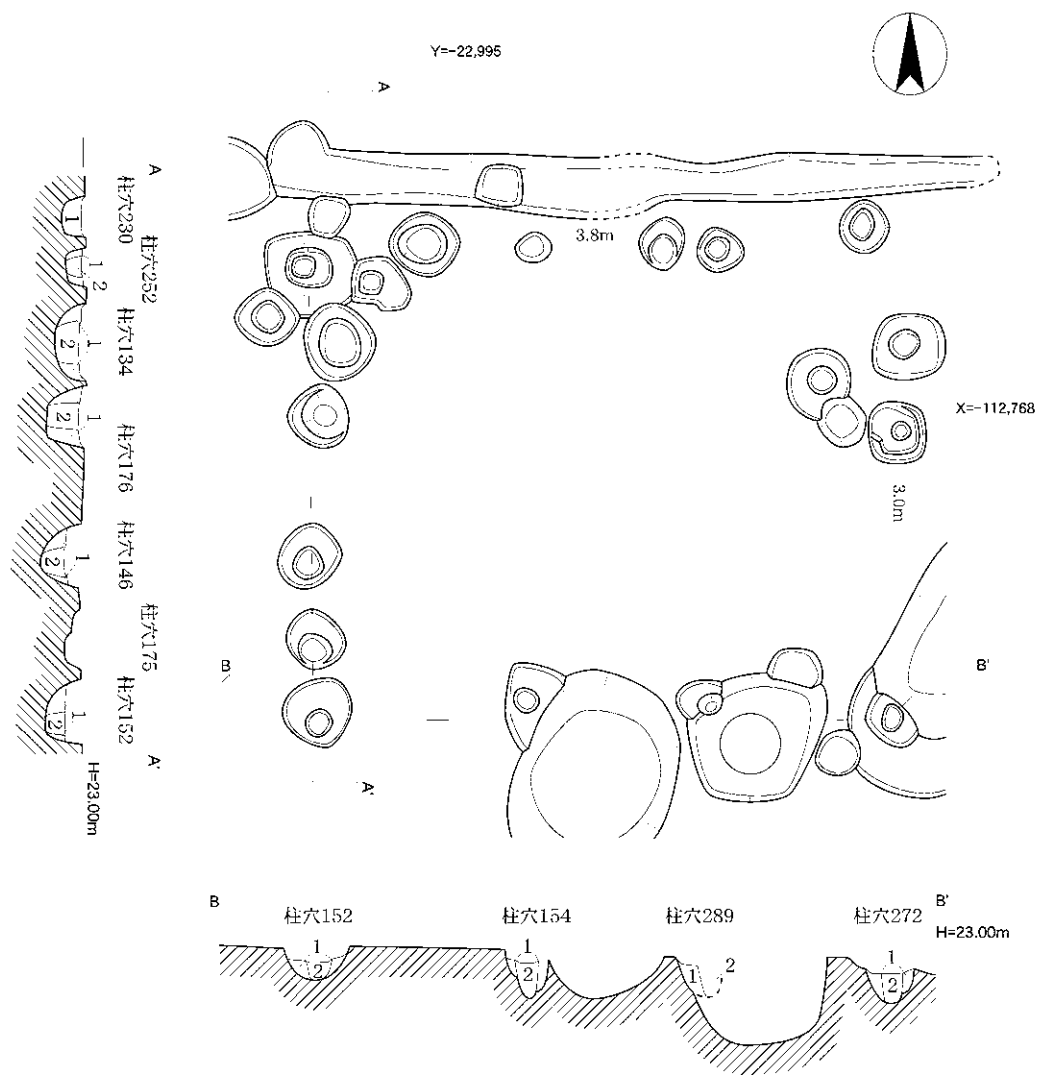
建物3 (図7) 調査区の北半部で検出した東西3間(3.8m)、南北3間(3.0m)の掘立柱建物である。側柱列には多数の柱穴がみられることから、数回の建て替えがあったものと考えられる。柱穴の掘形は径0.3～0.4mの円形、深さ0.1～0.4m、柱当は直径0.1～0.15mの円形を呈する。建物の方位は、ほぼ真北である。

建物4 (図8) 調査区の南半で検出した東西2間(2.0m)、南北3間(2.7m)の掘立柱建物である。底部に瓦や石を据えているものもある。建物の方位はほぼ真北である。西側については、壁面際で柱列を検出していることから、さらに調査区外に延びる可能性があり検討を要する。

柵6 (図8) 調査区の南端で検出した東西方向の柵で、5.5m分を検出した。さらに調査区外の東西に延びる。柱間は2.0m・1.2mと不揃いである。針小路の推定北築地心より約2m南に位置する。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代中期 ～後期	建物3・4、柵6、井戸186、溝148、土坑169・171	
鎌倉時代 ～室町時代	井戸172・197・220、溝184・188、堀状遺構77、土坑96	
江戸時代	建物1・2、布掘柱列5	

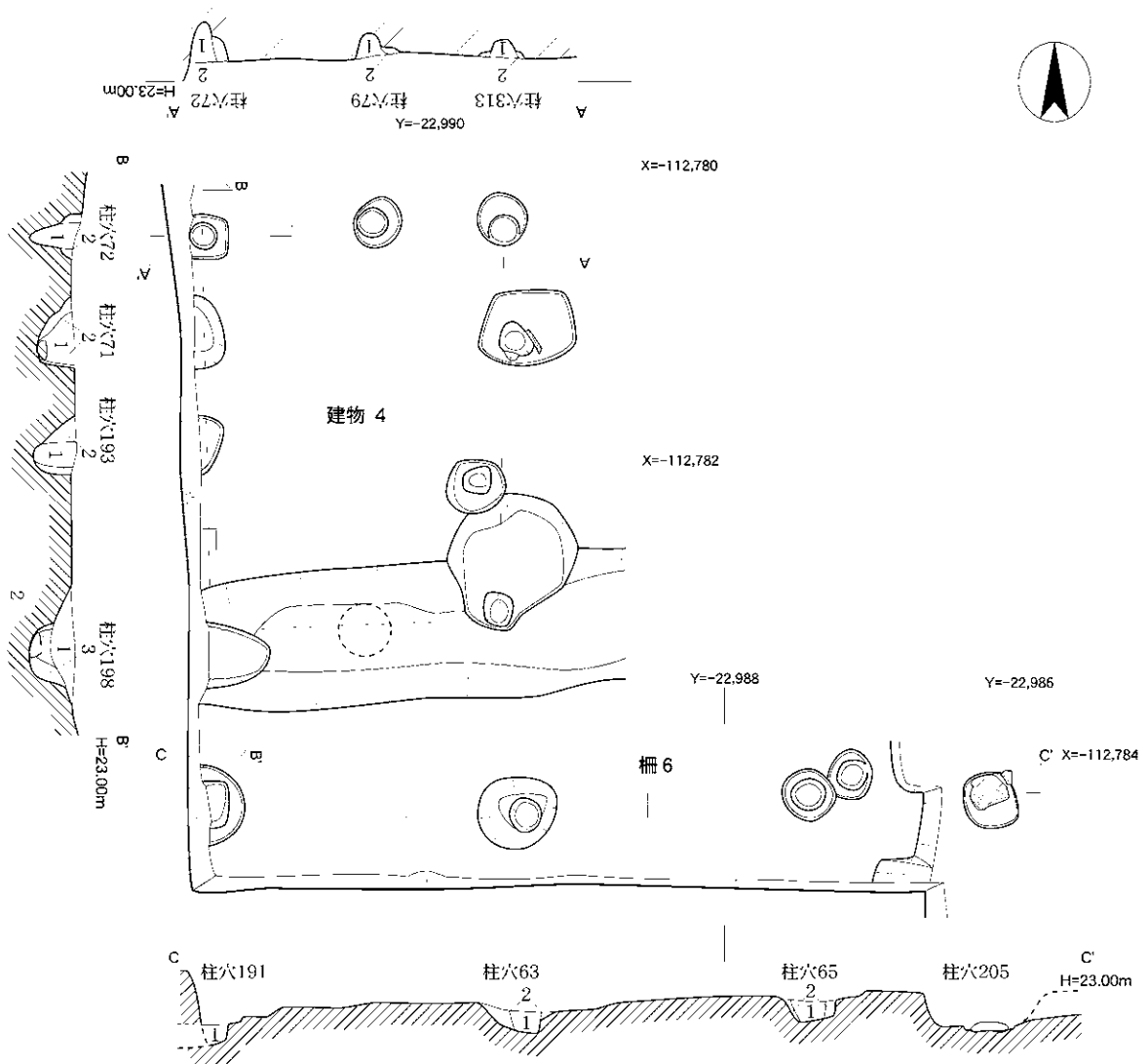


- 柱穴230
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 柱穴252
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 柱穴134
1 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 柱穴176
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
2 10YR1/2 灰黄褐色砂泥
- 柱穴146
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR3/2 黒褐色砂泥

- 柱穴152
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 柱穴154
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR1/3 にぶい黄褐色砂泥
- 柱穴289
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 柱穴272
1 10YR2/2 黒褐色砂泥
2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥

0 2m

図7 建物3実測図 (1:50)



建物 4

柱穴72

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柱穴71

- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柱穴193

- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柱穴198

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柱穴313

- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
- 2 2.5Y4/2 暗褐色砂泥

柱穴79

- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柵 6

柱穴191

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

柱穴63

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR3/2 黒褐色泥砂

柱穴65

- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR3/2 黒褐色泥砂



図8 建物4・柵6実測図 (1 : 50)

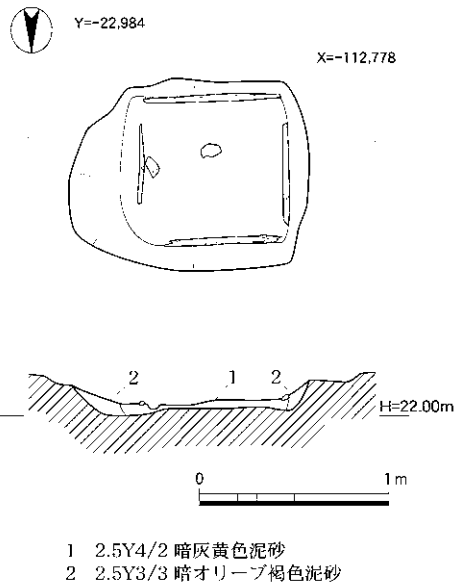


図9 井戸 186 実測図 (1:40)

溝 148 調査区のほぼ中央部で検出した東西方向の溝である。東西はさらに調査区外に延びる。規模は幅 3 m、深さ 0.5 m である。南肩口は南の針小路推定北築地心から北約 6 m に位置する。

井戸 186 (図 9、図版 4-1) 調査区の南半部、堀状遺構 77 の底面で検出した方形木枠の井戸である。上部のほとんどが破壊されていた。掘形は方形を呈し、井戸枠は方形縦板横棧組と考えられる。底部に最下段の横棧が残存しており、復元すると一辺約 0.8 m の井戸枠となる。井戸底部から土師器小片と平瓦片が出土している。

土坑 144 調査区北西部で検出した、ほぼ円形の土坑である。径は約 1.3 m、深さ 0.4 m である。西端は

溝 250 の東肩と重複している。土坑内からは土師器皿と軒丸瓦が出土している。

土坑 169 調査区の北半部で検出した南北に長い土坑である。規模は長さ約 4.5 m、幅約 1.0 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。底面には炭化物が薄く堆積する。土坑内からは完形か完形に近い土師器皿や瓦器椀・鍋が出土している。

土坑 171 調査区のほぼ中央北寄りで検出した不定形の土坑である。東西 2.8 m、南北 2.2 m 以上、深さ 0.2 m。北端は攪乱により削平を受けている。土坑内から土師器皿が多量に出土している。

(4) 室町時代の遺構 (図版 1・3-1)

堀状遺構 77 (図 10、図版 4-4) 調査区東半部で検出した南北方向の堀状遺構である。規模は幅約 4.0 m、深さ 0.6 m で、検出長は約 22 m あり、さらに北と南の調査区外に延びる。出土遺物や埋土の堆積状況から室町時代に掘削され、一部は縮小しながらも江戸時代まで存続していたと

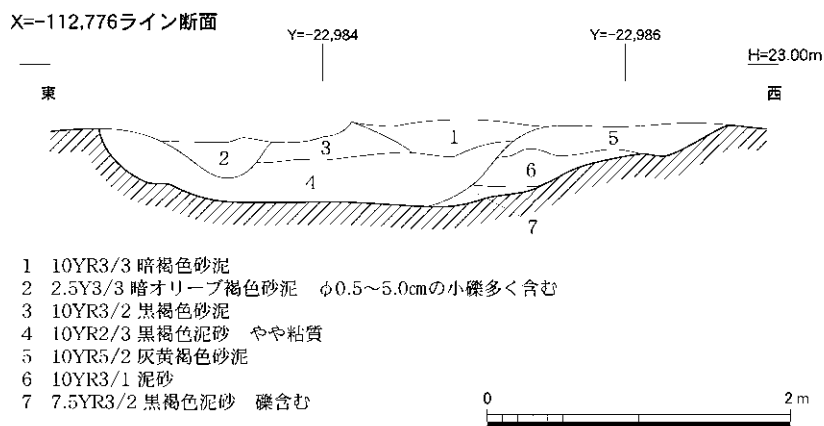


図 10 堀状遺構 77 断面図 (1:50)

みられる。

溝 89 調査区のほぼ中央で検出した北東から南西方向の溝である。規模は幅 0.4～0.8 m、深さ 0.3～0.4 m である。出土遺物や堆積状況から堀状遺構 77 から分岐した溝と考えられる。

溝 157 調査区北西部で検出した北西から南東方向の溝である。規模は幅 0.4～0.8 m、深さ 0.3～0.4 m である。出土遺物や堆積状況から、東端は溝 89 に合流すると考えている。

溝 184 調査区の北端で検出した東西溝で、北肩は調査区外である。現状では幅 1 m 以上、深さ 0.4～0.5 m で、東端は堀状遺構 77 に取り付く。

溝 188 調査区の南半で検出した東西溝である。規模は幅約 1 m、深さ 0.3 m。東端は堀状遺構 77 に取り付く。なお、溝 184 と当溝間は約 18 m ある。

溝 250 調査区の西端で検出した南北方向の溝で、西肩は調査区外である。現状では幅 1 m 以上、深さ 0.3～0.5 m である。北は溝 184 に取り付く。南は調査区外に延びる。堀状遺構 77 の西肩からは西に約 12 m ある。

土坑 126 調査区の北西部で検出した楕円形の土坑である。北半は削平を受けている。規模は東西 0.45 m、南北 0.3 m 以上、深さ 0.2 m である。土坑内から鎌倉時代の軒丸瓦が出土している。

土坑 298 調査区北半で検出した、ほぼ円形の土坑である。径 0.8 m、深さ 0.2 m である。土坑内から瓦器の茶釜が出土している。

井戸 197 (図 11、図版 4-2) 調査区の南半部の溝 148 上面で検出した石組井戸である。井戸上部は破壊されていたが、南半の石組最下段の基底部分が残存していた。残存状態から推定すると掘形の規模は径約 2.0 m の円形で、深さが 1.3 m である。井戸内底部には水溜用の曲物が、中央から北寄りにある。曲物は径 0.45 m、高さ 0.05 m である。また、石材に混じって磚が多く用いら

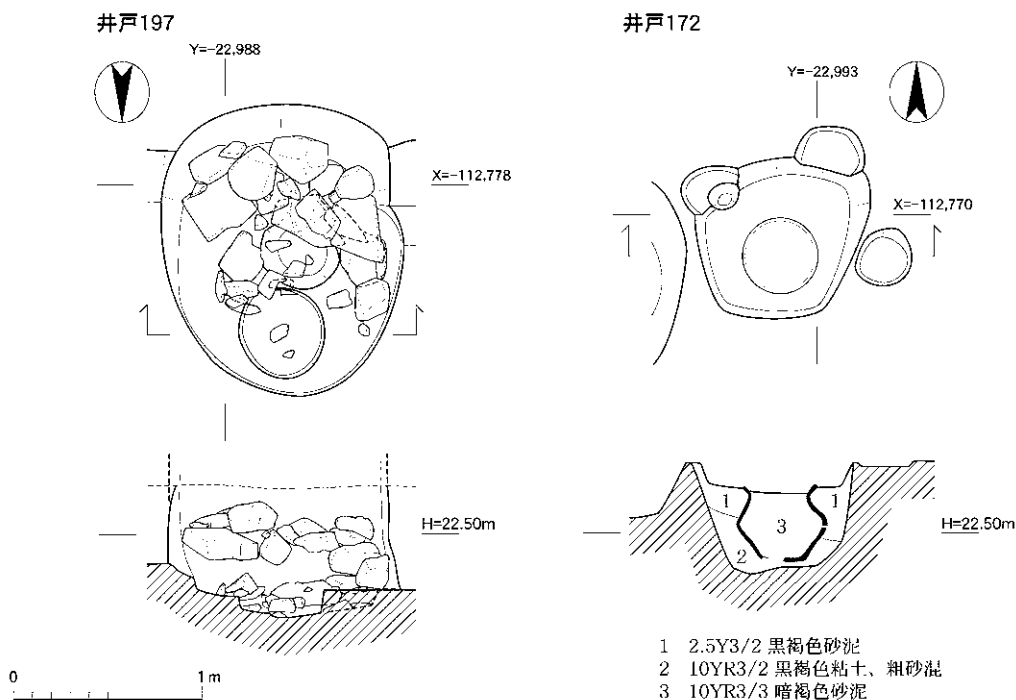


図 11 井戸 197・172 実測図 (1:40)

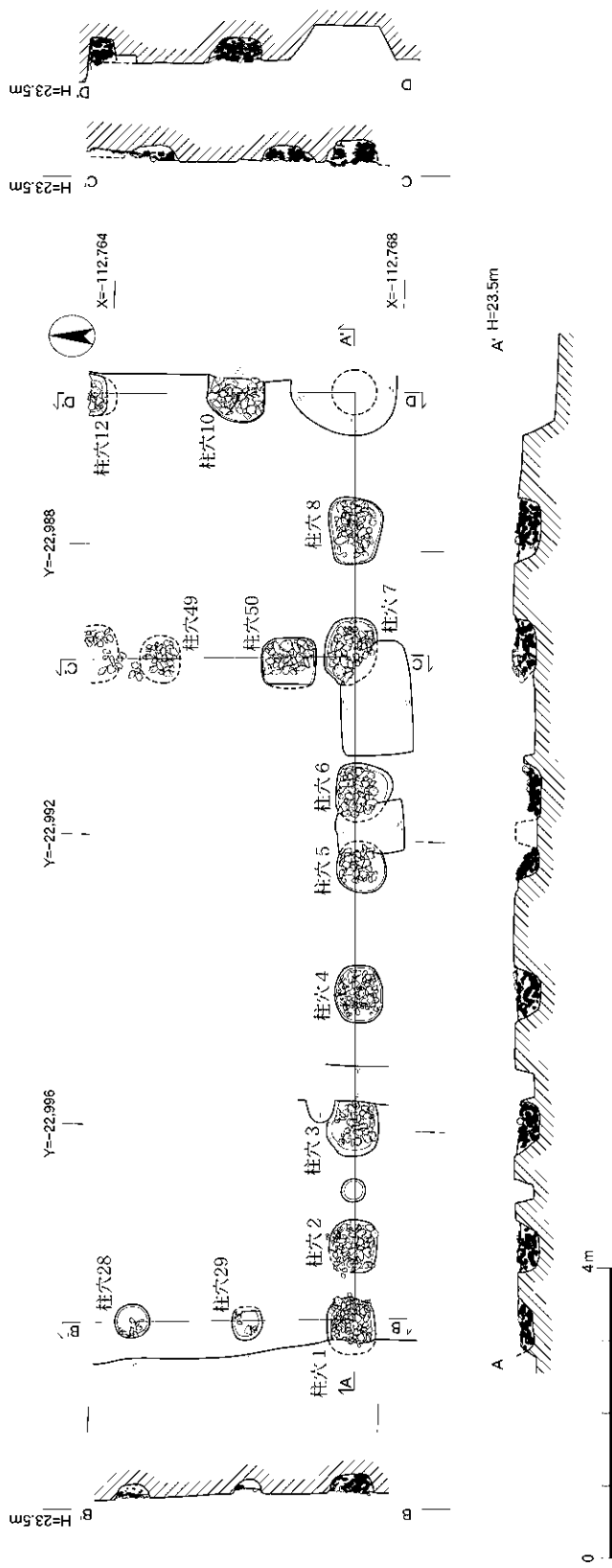


图 12 建物 1 实测图 (1 : 100)

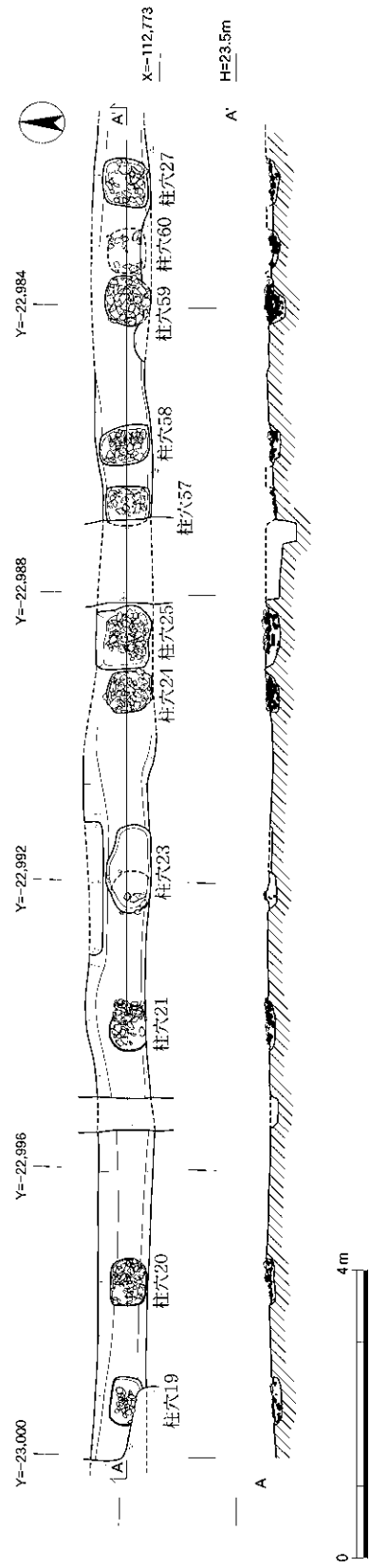


图 13 布掘柱列 5 实测图 (1 : 100)

れていた。

井戸 220 調査区の北側西壁沿いで検出した円形の井戸である。井戸枠は検出していない。規模は径 3.0 m、深さ 1.2 m である。

井戸 172 (図 11、図版 4- 3) 調査区の北半部で検出した井戸である。掘形は径 1.4 m の円形を呈し、深さ 0.6 m である。井戸枠には底を打ち欠いた信楽焼の大甕 (最大腹径 0.5 m) を用いている。

(5) 江戸時代の遺構 (図版 2・3- 2)

建物 1 (図 12) 調査区北側で検出した東西 8 間 (13 m)、南北 2 間 (4 m) 以上の東西棟の礎石建物である。礎石は残存していないが、据付穴には拳大の礫がぎっしりと詰められているものが多い。柱間は 1.8 m と 1.0 m である。据付穴の掘形は一辺 0.6 ~ 0.7 m の円形ないし隅丸方形を呈し、深さ 0.3 ~ 0.4 m である。主軸方向は東で北に振れる。

建物 2 (図 14) 建物 1 の南 2 m に位置する東西 4 間 (10 m) 以上、南北 1 間 (2.6 m) の東西棟の礎石建物である。建物 1 と同様、礎石は残存していないが、据付穴には拳大の礫がぎっしりと詰められているものが多い。柱間は 2.6 m、2.0 m である。据付穴掘形は一辺 0.6 ~ 0.8 m の円形ないし隅丸方形である。深さは 0.3 ~ 0.4 m である。主軸方向は東で北に振れる。

布掘柱列 5 (図 13) 建物 2 の南 0.5 m、建物 1 からは 5 m 南に位置する、東西溝と溝底面で検出した礎石据付穴列である。溝は幅 0.6 ~ 0.8 m で、深さ 0.2 ~ 0.3 m。礎石据付穴の掘形は一辺 0.5 ~ 0.8 m の円形ないし隅丸方形で、深さ 0.1 ~ 0.3 m である。礎石は残存していないが、底部には礫が残るものが多い。主軸方向は東で北に振れる。

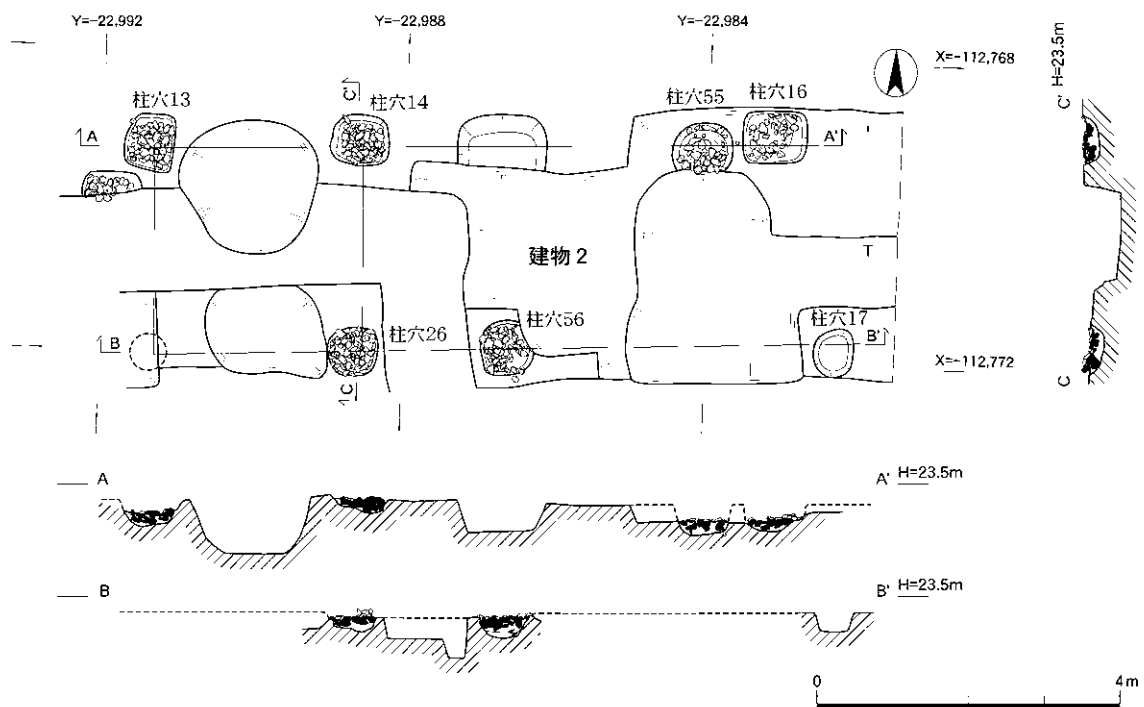


図 14 建物 2 実測図 (1 : 100)

4. 遺 物

出土遺物は整理箱で136箱である。遺物は平安時代から江戸時代までのものがある。時期別にみると平安時代後期と江戸時代のものが多く出土している。遺物には土器類、瓦類、金属製品、木製品、土製品などがあり、土器類が最も多く、次いで瓦類が多い。

(1) 土器類

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。以下では、各時期の主要な遺構の出土土器について概述する。

土坑171出土土器(図15、図版5) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。土師器には小型皿(1~4)、口縁部が屈曲する小型皿(5)、受け皿形の小型皿(6)、口縁部が外反する小型皿(7)・大型皿(8~10)、口縁部が外反する甕(11)がある。輸入陶磁器の白磁椀(12・13)は削り出し高台で、いずれも口縁部・体部を欠損する。V期中~新段階に属する。

土坑169出土土器(図15、図版5) 土師器、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、輸入陶磁器などがある。土師器には口縁部が内湾する小型皿(14~16)、口縁部が屈曲する小型皿(17)、口縁部が外反する大型皿(18)がある。灰釉系陶器の椀(19)は、いわゆる山茶椀で、底部は糸切りの後、高台を貼り付ける。口縁・体部は欠損している。輸入陶磁器の白磁椀(20)は削り出し高台で、口縁・体部は欠損する。V期中~新段階に属する。

堀状遺構77出土土器(図15、図版5・6) 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土師器には小型のへそ皿(21)、口縁部が外反する白色系の中型皿(22)、口縁部が外反する大型皿(23~25)がある。輸入陶磁器の白磁皿(26)は、口縁部が外反し口縁端部の釉を掻き取ったいわゆる口禿である。輸入陶磁器の鉄釉小鉢(27)は、口縁端部を上下に拡張する片口の鉢である。IX期新~X期古段階に属する。

表2 遺物概要表

時代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、緑釉瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、埴	40箱	土師器16点、灰釉系陶器1点、輸入陶磁器3点、緑釉軒丸瓦1点、軒丸瓦2点、緑釉軒平瓦1点、軒平瓦5点、溶着した瓦1点、埴1点	22箱	18箱
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	37箱	土師器12点、瓦器1点、焼締陶器2点、輸入陶磁器2点、軒丸瓦4点、軒平瓦4点	17箱	20箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、軒丸瓦、軒平瓦、横棧瓦、丸瓦、平瓦	59箱	土師器2点、横棧瓦1点	10箱	49箱
合 計		141箱	59点(5箱)	49箱	87箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

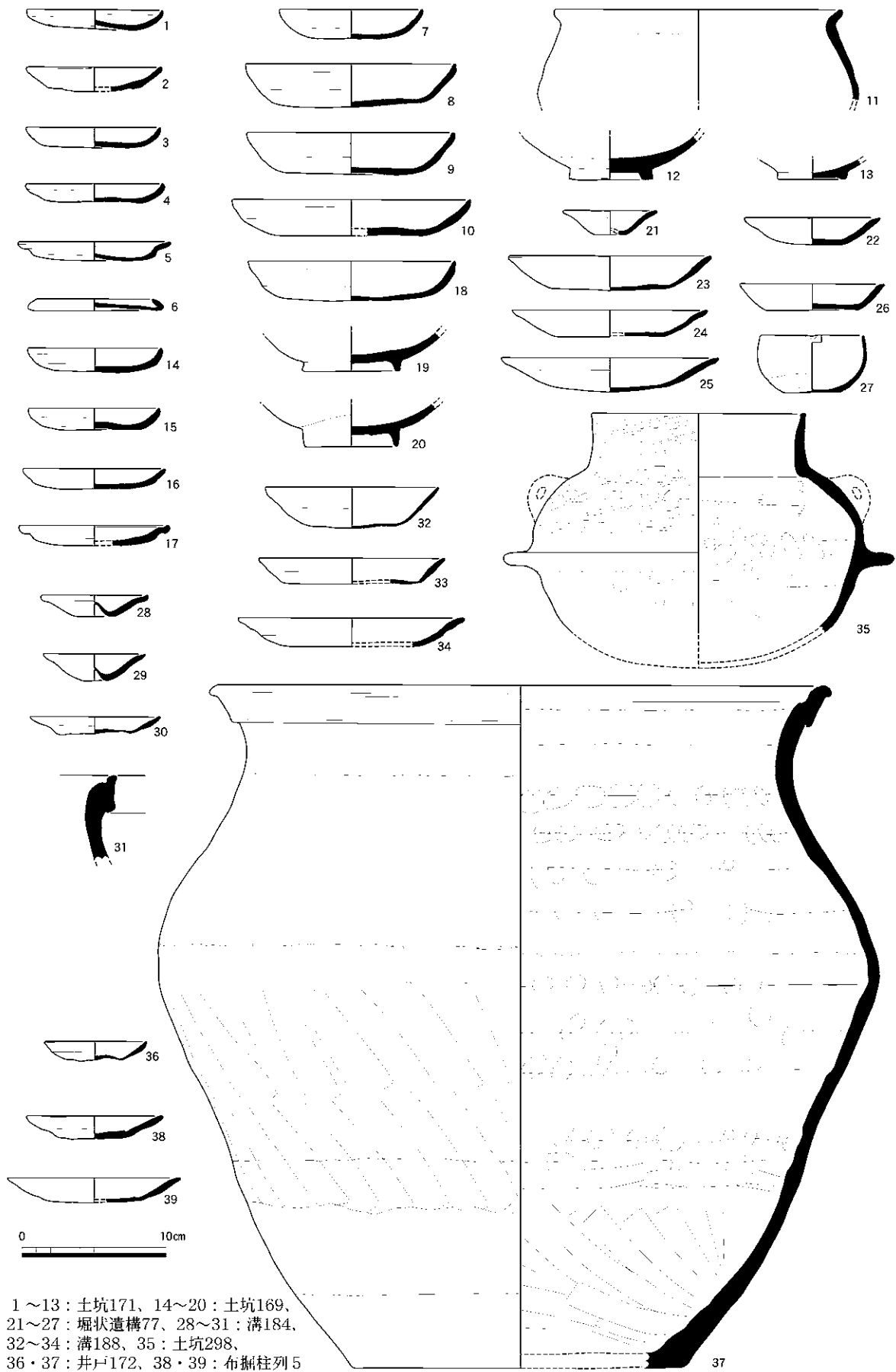


图 15 出土土器实测图 (1 : 4)

溝 184 出土土器 (図 15、図版 6) 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土師器には小型のへそ皿 (28・29)、口縁が外反する小型皿 (30) がある。焼締陶器には口縁部を上方へ拡張する常滑産の甕 (31) がある。X 期古～中段階に属する。

溝 188 出土土器 (図 15) 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土師器のみ図示した。いずれも口縁が外反する大型皿 (32～34) である。口径は 12 cm、14 cm、15 cm である。32 は白色系、33・34 は赤色系である。X 期中～新段階に属する。

土坑 298 出土土器 (図 15、図版 6) 土師器、瓦器がある。瓦器には茶釜 (35) がある。口縁部が高く体部は丸みを帯びている。器壁はやや厚い。外面肩部には耳が付くタイプである。

井戸 172 出土土器 (図 15、図版 6) 井戸枠に底を打ち欠いた信楽焼の甕 (37) と、埋土から土師器の小型皿 (36) が出土した。甕 (37) は口径 42 cm、器高 42.2 cm、体部最大径 50 cm である。口縁端部は N 字状に折り返す。体部内面は指オサエ、外面下半は板ナデの痕跡がみられる。X 期中段階に属する。

布掘柱列 5 出土土器 (図 15、図版 6) 土師器、施釉陶器、染付などがある。土師器のみを図示した。白色系の小型皿 (38) と大型皿 (39) がある。いずれも内面に工具を用いた明瞭な圈線が施される。XII 期新～期古段階に属する。

(2) 瓦類

瓦類には緑釉軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・熨斗瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、塼など平安時代前期から江戸時代後期のものである。瓦類全体においては丸瓦、平瓦が多い。平安時代の瓦については、瓦窯壁に用いたとみられる丸瓦・平瓦が何枚も溶着したのものもある。特に軒丸瓦・軒平瓦については複弁八弁蓮華文の緑釉軒丸瓦と外行唐草文の緑釉軒平瓦が出土している。また、中心飾りに「左寺」銘の軒平瓦もみられ、調査区周辺にあったとされる瓦窯との関係で注目される。中・近世の軒瓦には多種多様な文様がみられる。以下、主要な軒瓦について概説する。

軒丸瓦 (図 16、図版 7) 瓦 1 は、緑釉複弁八弁蓮華文で、中房には 1 + 8 の蓮子があるタイプである。外区には珠文が巡る。濃緑色の釉を施す。1977 年から 1980 年にかけて行われた防災施設工事に伴う境内での講堂の調査で出土した緑釉瓦と同文であり、その関連が考えられる。溝 148 から出土した。平安時代前期。栗栖野産。

瓦 2 は複弁八弁蓮華文で、子葉は盛り上がる。蓮弁周囲に輪郭線が連続し、外区は珠文が粗く巡る特徴をもつ。土坑 144 から出土した。平安時代後期。播磨産。瓦 3 は左巻きの三巴文である。巴の頭部は押さえでつぶれている。尾部は長く互いに接しない。溝 148 から出土した。平安時代後期。山城産。

瓦 4～瓦 7 は鎌倉時代から室町時代のものである。瓦 4～瓦 6 は右巻きの三巴文である。瓦 4 は頭部は離れ、尾部は界線に接する。外区は小粒の珠文が密に巡る。瓦当部裏面の上端に浅い溝を付け、丸瓦を接合する。土坑 126 から出土した。瓦 5 は頭部は離れ尾部も互いに接しない。外区には大粒の珠文が密に巡る。瓦当部裏面の上端に浅い溝を付け、丸瓦を接合する。攪乱部から

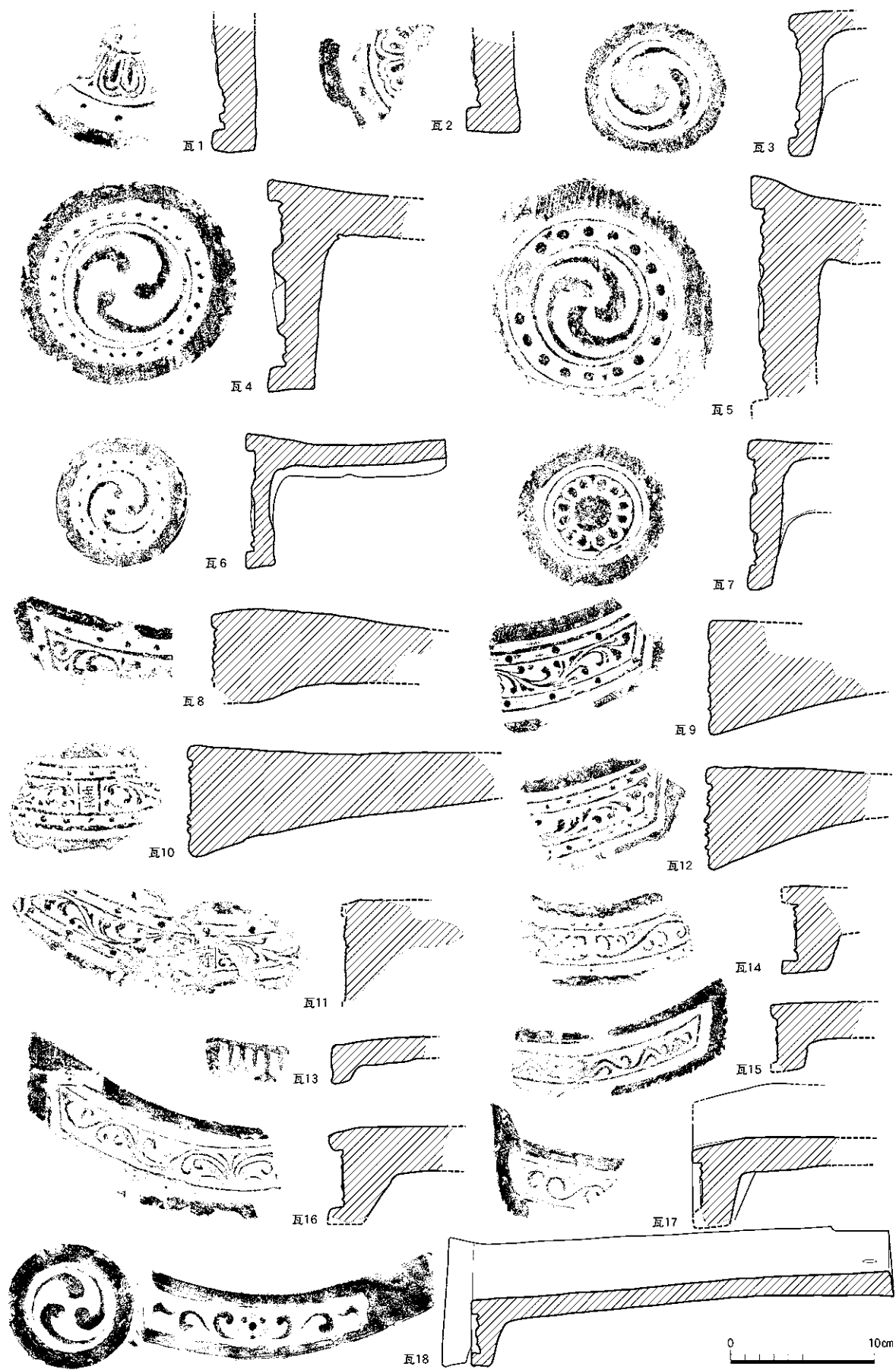


图 16 出土軒瓦拓影·实测图 (1 : 4)

出土した。瓦6は熨斗瓦の間に組み込んで使う小型の棟込瓦である。頭部は離れ、尾部は互いに接しない。外区は小さな珠文が密に巡る。瓦当部裏面の上端に浅い溝を付け、丸瓦を接合する。江戸時代の整地層から出土した。瓦7は複弁六弁蓮華文の小型瓦である。凸型中房で蓮子はみられない。江戸時代の整地層から出土した。

軒平瓦（図16、図版7・8）瓦8は緑釉唐草文である。中心飾りが対向C字形で上に対葉文を配する均整唐草文である。枝葉の先端が水滴状になる。外区は珠文が巡る。瓦当面、側面に濃緑色の釉を施す。緑釉軒丸瓦（瓦1）と同様、同文が講堂の調査で出土している。溝148から出土した。平安時代前期。栗栖野産。

瓦9～瓦12は中心に「左寺」銘を配する均整唐草文。ただし、瓦10は「左寺」銘が逆字である。いずれも枝葉の先端は水滴状になる。外区には珠文が巡る。曲線顎。瓦9は土坑171、瓦10は第2層上面、瓦11は溝89、瓦12は堀状遺構77から各々出土した。いずれも平安時代前期。東寺境内瓦窯産。瓦13は剣頭文を垂直に配する小型瓦で、瓦当部の成形は折り曲げ技法による。溝89から出土した。平安時代後期。山城産。

瓦14～瓦16は鎌倉時代のもので、文覚上人が東寺再建に用いた瓦とみられる。いずれも瓦当部は顎部貼付け成形である。中心飾りは瓦14が対向C字形、瓦15は花文、瓦16は三葉形である。また、瓦14は珠文が不規則に巡る。瓦14・瓦15は堀状遺構77、瓦16は溝184から出土した。いずれも播磨産である。瓦17は凹面の両側面に立ち上がりが設けられ、さらに平瓦凸面中央に凸帯が付く掛け瓦である。溝89から出土した。室町時代。

瓦18は横棧瓦のほぼ完形で、丸瓦当は右巻きの三巴文である。平瓦当は均整唐草文で、中心飾りは簡略化された花文。丸瓦と平瓦の周縁上端・下端は面取りが施されている。布掘柱列5の溝内から出土した。江戸時代後期。

緑釉瓦 7点出土している。素地は粗く白いものと、堅い灰色のものがある。平坦で幅の狭い熨斗瓦、丸瓦、軒瓦の破片がある。ほとんどが溝148から出土している。

溶着した瓦（図17） 瓦19は丸瓦や半截した平瓦が6枚溶着したものである。瓦の間にはスス入り粘土が認められることから、平窯のうねの一部であると考えられる。溝250から出土した。



図17 溶着した瓦



図18 埴

平安時代。

埴 (図 18) 瓦 20 は一辺 28.7 cm の方形で、厚さ 8.5 cm の埴である。胎土は精良で、焼成は良好で硬質である。井戸 197 から出土した。平安時代。

(3) 自然遺物

室町時代の堀状遺構 (堀状遺構 77)、平安時代以前の北東から南西方向の旧流路 (流路 189) の土壌をサンプリングし、分析を行った (図 19、表 3)。

堀状遺構 77 木本は植栽されるものと日当たりのよい攪乱された土地に生育するものがあり、草本はアカザ属・ヒユ属・カタバミ属など耕地や日当たりのよい攪乱された土地を適地とするものとウリ科・ナス科など栽培種とされるものなど人為的な要因が反映したものが多く、昆虫の多さも人為的な要因を反映している可能性がある。堀状遺構が機能していた頃は、周囲に人家のある緩流であったと考えられる。

流路 189 木本は見られず、草本はキンポウゲ属・セリ科・オモダカ科・ミズアオイ科・カヤツリグサ科など水湿性のものが多い。特にオモダカ科・ミズアオイ科は池沼の様な滞水性を適地としている。旧流路の頃は、周囲が開けた池沼と考えられる。

表 3 堀状遺構 77・流路 189 出土自然遺物一覧表

木本			サンプリング量	約230m ²	約210m ²
番号	和名	部位	科名	堀状遺構77	流路189
1	二葉マツ	種子	マツ	2	
2	スギ	種子	スギ	2	
3	ヒノキ小枝		ヒノキ	1	
4	ムクノキ	種子	ニレ	1	
5	ヒサカキ	種子	ツバキ	5	
6	キイチゴ属	核	バラ	3	
7	アカメガシワ	種子	トウダイグサ	5	
8	クロガネモチ	核	モチノキ	38	
9	タラノキ	種子	ウコギ	5	
10	タラノキのトゲ		ウコギ	1	
11	クサギ	核	ウコギ	1	
12	ニワトコ	核	スイカズラ	1	
草本					
番号	和名	部位	科名	堀状遺構77	流路189
13	ミゾソバ	果実	タデ	2	1
14	タデ科三稜	果実	タデ	1	5
15	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	1	3
16	ノミノフスマ	種子	ハコベ	2	
17	ハコベ属	種子	ハコベ	14	57
18	アカザ属	種子	アカザ	1	
19	ヒユ属	種子	ヒユ	6	
20	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ		3
21	タガラシ?	果実	キンポウゲ	1	
22	アブラナ科	種子	アブラナ		8
23	ヘビイチゴ属かキジムシロ属	核	バラ		1
24	カタバミ属	種子	カタバミ	9	
25	エノキグサ	種子	トウダイグサ	1	
26	ウリ科	種子	ウリ	3	
27	メロンの仲間	種子	ウリ	1	
28	セリ科	果実	セリ		10
29	コナスビ	種子	サクラソウ		1
30	トウバナ属	果実	シソ	1	
31	ナス	種子	ナス	2	
32	ナス科	種子	ナス	2	5
33	タカサブロウ	果実	キク	2	
34	ヘラオモダカ	果実	オモダカ		15
35	オモダカ属	果実	オモダカ		2
36	オモダカ科	種子	オモダカ		1
37	ミズアオイ	種子	ミズアオイ		1
38	コナギ	種子	ミズアオイ	1	7
39	イボクサ	種子	ツユクサ		1
40	カヤツリグサ (三稜)	果実	カヤツリグサ	4	63
41	カヤツリグサ (扁 ²)	果実	カヤツリグサ	2	19
42	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ		15
その他					
番号	和名	部位	科名	堀状遺構77	流路189
43	昆虫			97	29
44	ダニ			1	
45	粘菌胞子囊			28	1

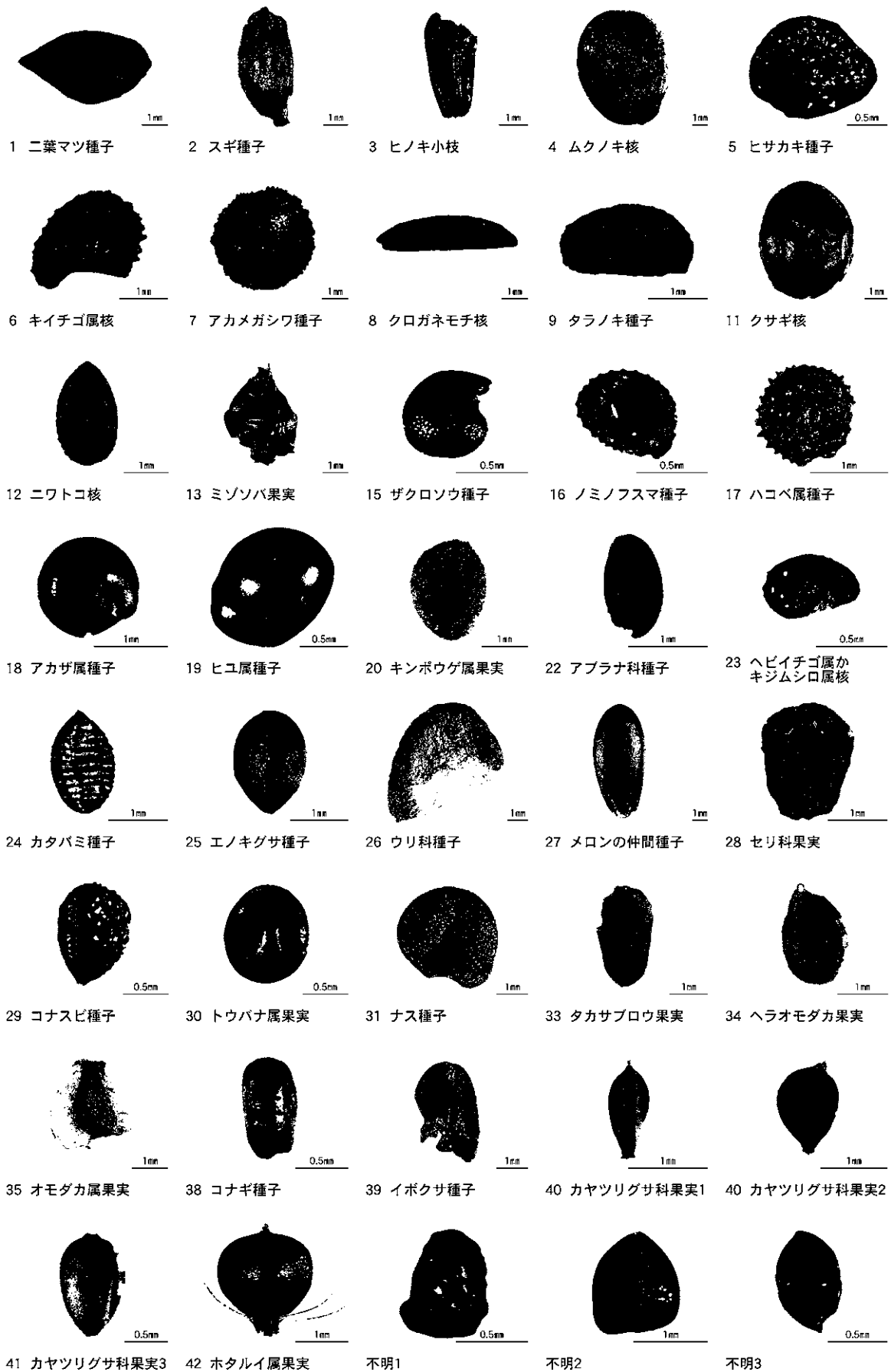


図 19 堀状遺構 77・流路 189 出土自然遺物

5. ま と め

今回の調査では、平安時代から江戸時代の遺構が良好に残存することが判明した。平安時代の遺構については東寺諸院推定復元図と、中世から近世の遺構については指図や絵図と対比しながら、以下に調査地の様相を要約する。

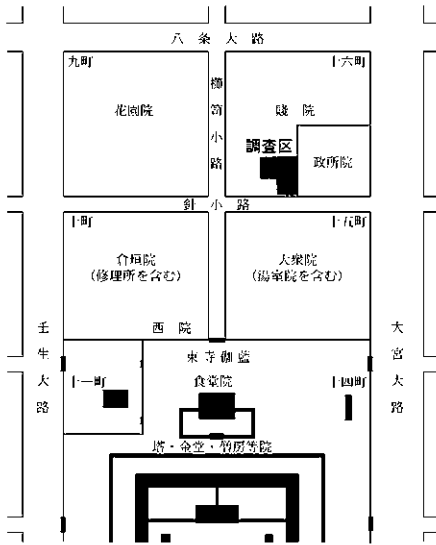
平安時代 調査地は東寺主要伽藍の北東に位置する平安京左京九条一坊十六町で、東寺の経営にかかわる政所院や賤院があったと考えられている。これは平城京の官寺である薬師寺・大安寺・興福寺などの事例から類推されたもので、東寺諸院推定復元図(図5・20-1)¹²⁾はそれに基づいて作成された。検出した平安時代後期の掘立柱建物、柵、東西溝や井戸は、推定復元図から賤院の施設にかかわる遺構とみられる。また、出土遺物については、1977年の東寺講堂の調査で出土した同文の緑釉軒丸瓦・軒平瓦と緑釉丸瓦・熨斗瓦や、中心飾りに「左寺」銘を配した軒平瓦は、東寺造営当初の建物に用いられたものと考えられる。また、大・小の塼や、溶着した数枚の平瓦は、1979年と2002年の十町の調査で検出された瓦窯関連遺構とともに、修理所があったとされる十町内における東寺所用瓦窯の存在を示唆するものとして重要である。

また、平安時代以前の当地周辺の地形環境については、旧流路(流路189)の土壌分析から、滞水植物が多くみられる池沼の広がり指摘されている。

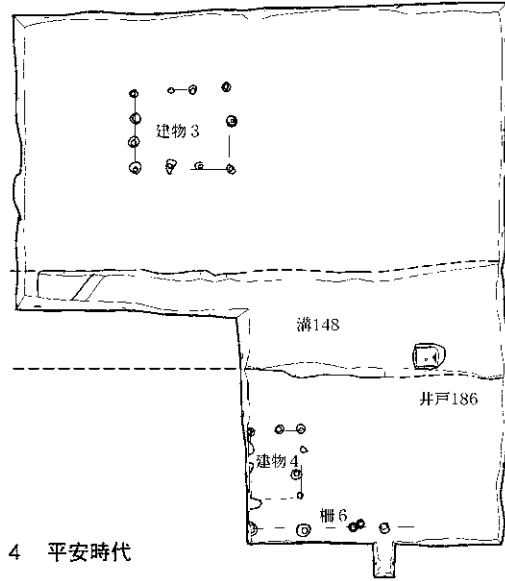
鎌倉時代から室町時代 文献によれば、東寺の寺域北側に鎌倉時代から子院が形成され始めたことが窺える。とくに十六町については、室町時代後期の「八条與針小路間櫛笥東頼指図」(図20-2・21)に地割りが描かれ、調査地は東寺子院の一つである「覚王院」に比定できる。また、造営当初からあったとされる政所院の推定地は、執行屋敷に変わっており、その北側は淳和院領と長方形や方形に区画された田地と百姓家である。覚王院は江戸期の絵図(図20-3・22)では執行屋敷の南接地に移動しており、その跡地には金剛珠院が示され、中世から近世の子院の動向を知るうえで興味深い。今回、検出した堀状遺構と溝は覚王院に関連する区画を示す遺構であり、特に南北方向の堀状遺構は指図から覚王院の東限とみられる。その規模は南北約18m、東西は約13mの234㎡で、柱穴群はその区画内にあった建物に伴うものである。室町時代には文明の土一揆など、幾たびか東寺が戦乱の地となった史実があり、防御施設として堀状遺構を備えていた子院の様子が窺える。

また、土壌分析からも堀状遺構の周囲には人家の存在を示す草本や種子などが抽出され、北側の百姓家や当地にあったとされる「覚王院」関連の建物の存在を裏付ける分析結果を得ている。

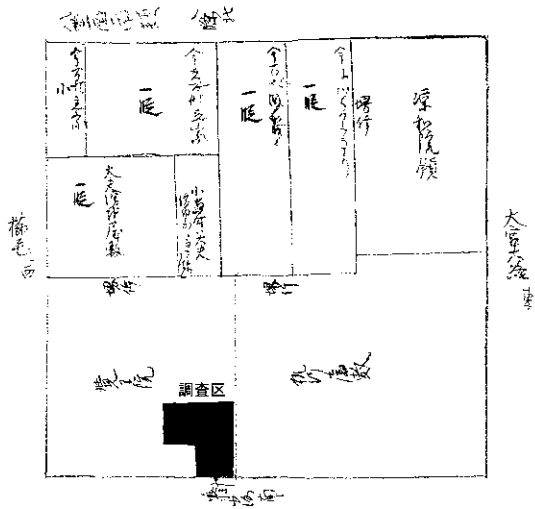
江戸時代 調査地は江戸時代中期に記された絵図「東寺子院古図」(図20-3・22)に示された東寺の子院・金剛珠院の境内地にあたる。絵図面に示された当院の主要な建物には該当せず、境内の南東隅の空白地である。ここには祠とみられる小規模な施設が示されているが、調査では確認できなかった。また、この絵図には検出した建物遺構などは示されていない。遺構の時期が江戸時代後期から幕末期にあたることから、建物2棟と布掘柱列は、絵図が作成された以降、新たに設けられた施設と考えられる。現在、調査地北側には明治十年(1877)に移建された宝菩提院が位置している。検出した北半の建物規模は、北接地に現存する当院の客殿と規模が同一である。



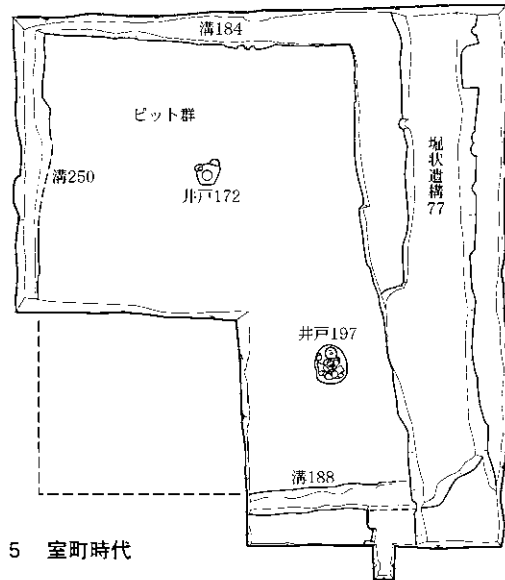
1 東寺諸院推定復元図



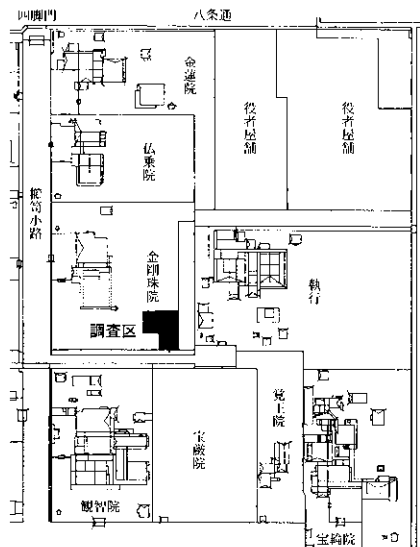
4 平安時代



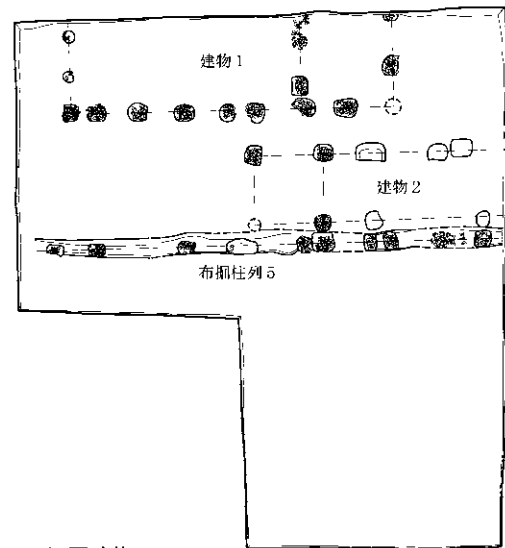
2 八條與針小路間櫛笥東類指図



5 室町時代



3 東寺子院古図



6 江戸時代

図20 時期別遺構概略図および推定復元図・指図・絵図

このことは検出した建物の性格を検討するうえで重要である。また、布掘柱列は建物に関連する区画を示す塀か柵として設けられたと考えられる。

以上、従来から未解明であった平安時代の東寺主要伽藍の東北地での様相の一端が判明した。さらに中世から近世の子院の新たな変遷過程も明らかにすることができた。

註

- 1) 杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 赤松俊秀編「八条與針小路間櫛笥東頼指図」『教王護国寺文書 絵図九』平楽寺書店 1970年
図中の書き込みに、南限の針小路に接して東西に列ぶ二区画に東から「執行屋敷 境竹」「覚王院 境竹」と示されている。
- 3) 「東寺子院古図」天保年間 東寺蔵
- 4) 杉山信三・長谷川行孝『(財)真言宗京都学園 洛南高等学校新築体育館用地 埋蔵文化財調査報告』東寺境内発掘調査団 洛南高校班 1981年
- 5) 吉崎 伸・高橋 潔ほか『東寺(教王護国寺)旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2001-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 6) 上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 7) 杉山信三ほか『教王護国寺防災施設工事 発掘調査報告書』1981年
- 8) 上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 9) 鈴木久男「東寺講堂須弥壇」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 10) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年
- 11) 杉山信三ほか『教王護国寺防災施設工事 発掘調査報告書』1981年
- 12) 杉山信三「第6章 東寺々地 - とくに北部の問題」『(財)真言宗京都学園 洛南高等学校新築体育館用地 埋蔵文化財調査報告』東寺境内発掘調査団 洛南高校班 1981年

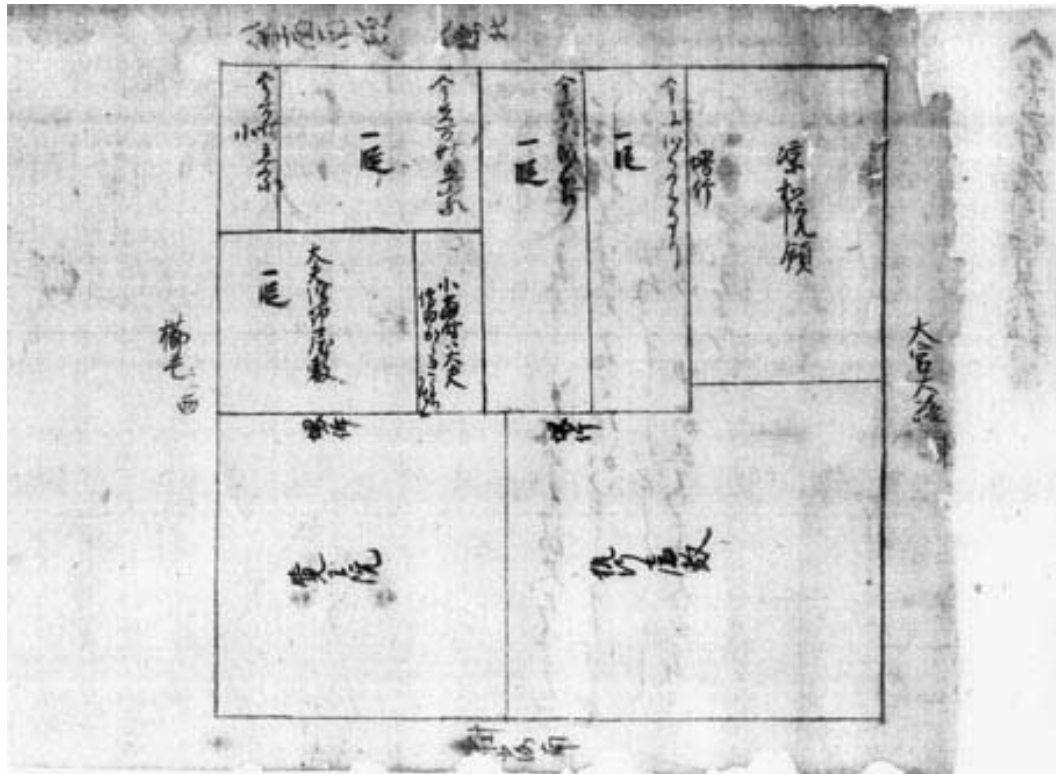


図 21 教王護国寺文書 絵図九「八条與針小路間櫛笥東頼指図」室町時代後期 京都大学総合博物館所蔵

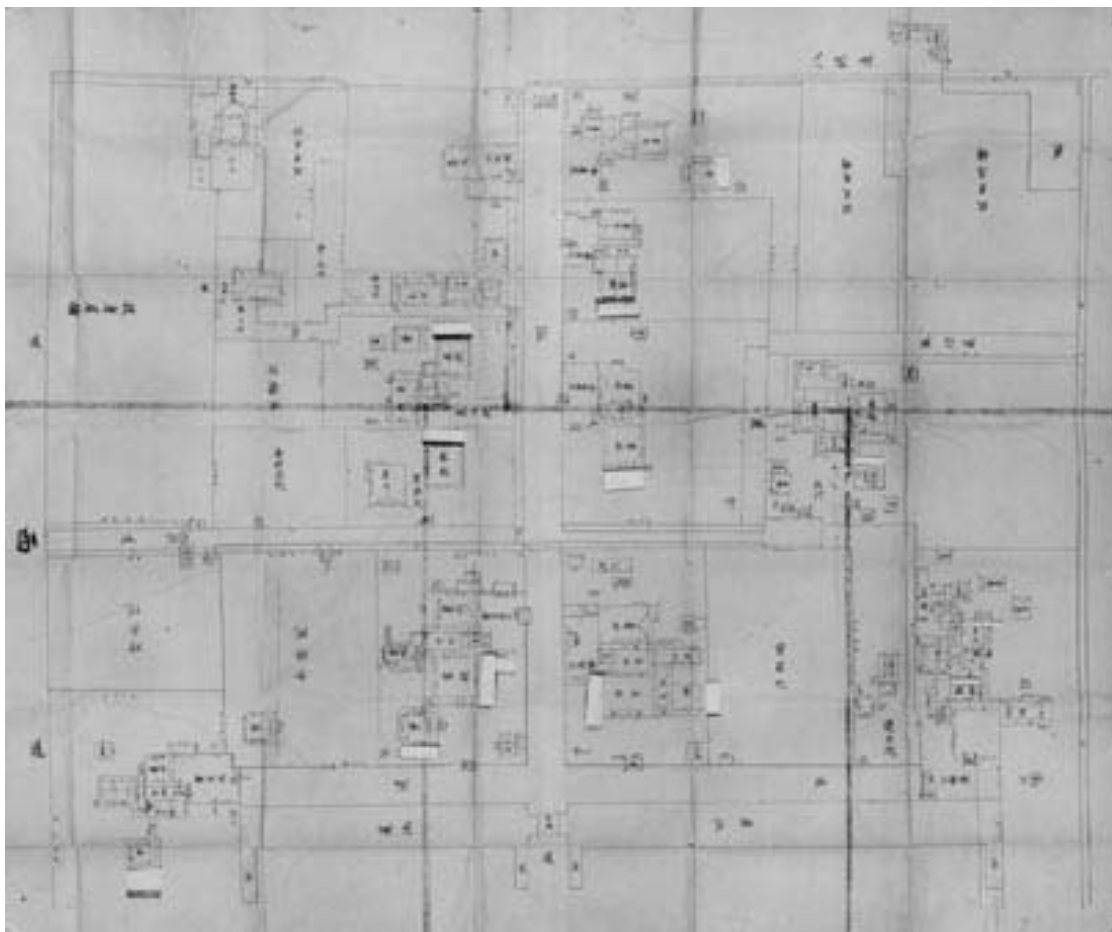


図 22 「東寺子院古図」天保年間 東寺所蔵

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうおうごこくじきゅうけいだい (とうじきゅうけいだい)							
書名	教王護国寺旧境内 (東寺旧境内)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-3							
編著者名	加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうおうごこくじ 教王護国寺 きゅうけいだい 旧境内 (とうじきゅうけいだい) (東寺旧境内)	きょうとうみなみく 京都市南区 おおみやどおりはちじょうさがる 大宮通八条下る くじょうちょう 九条町399番35	26100	758	34度 58分 60秒	135度 44分 53秒	2009年5月 25日～2009 年7月1日	330㎡	建物建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
教王護国寺 旧境内 (東寺旧境内)	寺院跡	平安時代	建物、柵、井戸、 溝、土坑		土師器、須恵器、瓦器、 灰釉陶器、緑釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類			
		鎌倉時代	井戸、溝、土坑、 堀状遺構		土師器、須恵器、瓦器、 施釉陶器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦類			
		江戸時代	建物、布掘柱列		土師器、施釉陶器、焼 締陶器、磁器、瓦類			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-3
教王護国寺旧境内（東寺旧境内）

発行日 2009年9月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961